

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十七章

Grand duchess leaves

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

37・Grand duchess leaves

347.

348.

349.

350.

351.

352.

353.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
X & Y	エドミールのボディーガード
アランデル	ポルタアウレア大公国の元首
マルガリータ	ポルタアウレア大公妃
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者

37・Grand duchess leaves

347.

ポルタアウレア大公国・マルガリータ大公妃が亡くなった。

「一年以上前から本人は余命を知っていた。おまえの結婚が決まってから、寿命が延びた、と
いって……本当に嬉しそうだった」

大公と息子、その婚約者の、三人の親族は、マルガリータの眠る部屋を白いバラで飾り、旅
だったひとをそれぞれに想った。一夜が明けて、国民に妃逝去の報せがもたらされると、市内到
る所に半旗が掲げられ、葬儀に向けて親交のあった国々から要人がやってくる。

秘密裏に例のポータル移設作業中だったこともあり、首都はほとんど戒厳令状態にあった。そ
の作業は大公妃逝去と同じくらいの重みを持っていて、優先度などつけられなかった。つまり同
時進行である。

桧山健の母親は大公家の一員だったのだから、健一家も親族の内に入るわけだが、幸か不幸
かそのことはまだ公表されていないし、健本人もそんなことは望んでいなかった。だから、真っ先
に、エドミール殿下に向かって宣言しておいた。

「オレは作業現場に詰める。ひろは実家が神社で葬儀には若干の心得があるから何かの役に立
つかかもしれない。だから置いていく。おたくには大公妃に対して、国民に対して、国外からの弔問
客に対して、公的にすることが山ほどあるだろ、そっちに専念してくれ」

クリスマン夫人が早々に弔問に訪れた、というか、こっそりやって来た。とるものもとあえず、と
いう風で。

「ついこのあいだ、マルガリータさまからお茶のお誘いがございまして、お会いしたばかりだった
のです。ええ、お見舞いというより、マルガリータさまの方から、お茶をご一緒に、ということでした。
とても落ち着いてらっしゃいまして、昔話などに花が咲きましたわ。なんとなく、これでさいごな
のかしら、なんて思ったりしたものでした……」

「……………」

「その時に、ちょっと、ソフィアさまのお話があって……」、と夫人は口ごもった。ソフィア公女失踪の件は、当時教育係だった夫人にとってあまり好ましい話題ではなかった。

「……母は、なんと？」

「いえ……なんということのない、とりとめもないお話で。ソフィアさまのお好きだったお菓子のこと、お花のこと、音楽のこと……お歳は離れていたけれど、妹のように慕わしかったと、懐かしそうに」

夫人は途中で涙ぐんだ。彼女はソフィアの生死についてまったく知らない。

「マダム」

「はい。殿下」

「ソフィアが好んだもの、ひとつひとつ、私も時折思い出します。彼女はそれらを好み、愛した。母は、彼女が愛したものを受け入れたのでしょう」

桧山健を紹介されたときのマルガリータの表情を、エドミールは思い返した。彼女はその時初めてソフィアが遺した息子の存在を知ったのだった。

348.

大公妃の面をよぎった複雑な表情に、健は改めてポルタアウレアにおける自分の立場を考えずにいられなかった。自身もそうだが、妻子も含めて相手を身構えさせるには十分な立場ではあった。なんたって、三十年も前に失踪した公女の遺児とその家族である。

とはいえ、ちょっと調べてもらえばわかることだが、健の経歴には怪しいところがひとつもなかったし、桧山家はかなりの資産家で、金銭に関するトラブルなどあった例(ためし)がない。……こういうのは桧山の養父母や弁護士ウィリアムス一家、彼らの厳しさ手堅さに感謝しなければならない……

ようするに、社会的地位や金銭的欲求といった下心や思惑があつての名乗りではないのだった。桧山健の登場は、エドミールがソフィアの墓参に赴いた際に見つけたという、ただそれだけだったのだ。

ソフィアの墓参に同行したことがある、と大公妃の口から聴かされて健は驚いた。

「ソフィアさまとはこの宮殿で十年ほどいっしょに暮らしたのです。そう、十代の、それは可愛らしい盛りで、よくおしゃべりしたものよ。世間話をね、今日のお菓子の焼き加減とか、晩ごはんのメ

ニューとか。ええ、ソフィアさまは厨房に立つのが好きで、よくご自分で料理をされていた。シェフが辟易するくらいにね。魚介料理がお上手で、私、魚介は苦手だったのだけど、ソフィアさまのおかげでいつの間にか大好きになったわ……」

気分がほぐれてくると、大公妃は健にそんな話を聞かせた。

そういえば、と健は思い起こした。アデレードの《ミッドランタ》には地中海料理のような魚介料理のメニューがあった。お客に評判がいいので、ずっと変えていない、古いレシピだとアイラが言っていた。あれはソフィアが持ち込んだものかもしれない。

健がそう話すと、大公妃は青灰色の目を丸くした。

「まあ！ あのお料理が！？ 今も残っているというの！？ でも、あり得るわ、とてもおいしかったもの！ エドミールったらどうして教えてくれなかったのかしら！ アデレードには何度かいっしょに行ったのに！」

「彼はつい最近まで《ミッドランタ》を知らなかったんです。え、アデレードに何度も行かれたのですか？」

「ええ、ソフィアさまのお墓参りに。ぶどう園に抱かれるような場所にあるわね、春になると一面、ぶどうが芽吹くの。湿った土の匂い、空気の柔らかな肌触り……ああ、春が来た。あの芽吹きを、ソフィアさまもご覧になったかしら……ほんのいつときでも、故郷を懐かしんでくださったものかしら、と……そんなことを想ったものよ……」

大公妃はある部屋に案内してくれた。

「ソフィアさまのお部屋よ。ほとんど手をつけてないの。ここにいる間は、このお部屋をお使いなさい。彼女のアトリエはエドミールに占領されてしまったけど、この部屋は入ってはいけないといっていますから」

母は、父に請われてロシアから嫁いできたのだ、とエドミールがあとで教えてくれた。「ソフィアがよく話し合い手をしていた。『お姉さま』『ソフィアさま』と呼び合って、仲がよかったんだ。だから——なんの前触れもなくいなくなってしまったことは、母にとって相当ショックだっただろうな。あれ以来、めっきり笑わなくなったからな——」

ソフィアを知る人にしてみれば、彼女をかどわかしした男とは、健の父親。いってみれば、恥知らずの、とんでもない極悪人だ。

《Fairy tale》がことの真相を明かしてくれなければ、健はどうてい、大公妃の前に出ることなどできなかったのだ。

大公妃の打ち解けようは、まったく奇跡的なことだったわけだ。

彼女の臨終には健一家も立ち会った。

「ケン？」と彼女は呼びかけた。「エドミールの力になってあげて——おねがいね——」

349.

大公妃在命中から水面下では葬儀の準備も進められていた。できるだけ、簡素に、という本人の希望で宮殿内で行われた。

しかし大公妃というお立場上、報を受けてやってくる外部の人間はけっこう多い。高齢の大公には座っていてもらわねばならないし、クリスマン外務長官と皇太子は対応に忙殺された。国としては、裏で行われている例の作業の危険性を考えるとできるだけ外から入国してもらいたくないが、そうもいかない。ことにマスメディアが入ってくるのはまったくもって嬉しくなかったのも、いろいろ理由をつけてできるかぎりご遠慮願った。

ポルタアウレアの男性の正装は細身の膝下まであるチュニックに細いパンツ、頭をターバンで覆うという、なんのことはない、かつての黄金門の正装と同じものだ。いかにもエキゾチックで、異国的風情がある。国防軍の正装も基本的な型はいっしょで、宮殿の衛兵もこの服装、観光客には人気があって、よくカメラを向けられている。

そして、胸に控えめかつ繊細な刺繍が施された黒い衣装と黒いターバンという、深緑の瞳の、長身の皇太子は人々の目を奪った。

アランデル大公の安定した治世が長いため、跡継ぎの存在はあまり知られていなかったのだが、限られたメディアのカメラがついに知られざる皇太子の姿をとらえてしまった。

ステージネームを使って、もう二十年も前から国の内外で活動していた彼だったが、公的な国際デビューはこの時だったのである。

彼が独身であることがわかると人々は色めき立ったが、ちょっと探してみれば、二十代から三十代にかけて、結婚を三度繰り返した経歴がわかる。そして今は独身。結婚相手はそれぞれ異なる理由で再起不能の身となっている。

人々は色めき立った次の瞬間、後ずさりする。

そういえば……ポルタアウレア大公家は呪われているという噂があったではないか！ 十年も前のこととなると、記憶はすっかり薄れてしまうものだが、エドミール殿下の場合、今もって独身ということは、やはりあの噂は本当だったのか！ なんていうことか！

殿下本人にしてみれば大きなお世話だが、トラブルの原因はおおよそ見当はついている。見当でどうにかなるものではないが、わけがわからないより、余程ましというものである。

(さて)、と殿下。

ボムソワール・レダ(マルガリータの魂)は、実の娘メルノ(ユミコ)を別の世界から守護するという約束をしてから逝った。そのためにこんにちまで生き永らえたのだ、と。

(ありがたいかぎりだ)

350.

ボディガードXは葬儀会場の外にいた。Yは葬儀に参列するマスターを護衛している。ほぼ無人の首都の街並みには明るい日差しが降り注いでいる。葬儀中は極力出歩くことのないよう、国民には秘かに通達がでていた。

ポータル移設作業中のため、かなりの人手がそちらに割かれていて首都の警備が行き届かないからである。長期滞在中に大公妃逝去に居合わせてしまった観光客がその辺を散策している。のどかといえばのどかな屋下がり。

と――

ふっと、空が翳ったようだった。

Xのイヤホンが通信を受信したのがほぼ同時だった。彼はぎょっと身構えた。移設作業現場にいる警備隊からだったから。相手の声が耳を撃った。

《警報！ 何かが浸入したぞ！！》

何かが浸入！？ なぜ！？ "力"を持っている能力者たちがそういうのを抑え込んでいるか、対処するんじゃないかったのか！？

抑え込みも対処も失敗したというのか！？

宮殿の警備員たちは同じ警報を受けてにわかに色めき立った。まさかの、こんな時に！！
だ。

誰かが聞き返した。『何かとは？』
《不明！ 目に見えんのだ！ ただ気配を感じる。異様な気配を感じる！》

警備員たちは呆然とした。そんなモノが相手――

＊

葬儀会場では儀式が終わり、参列者の献花に移るところだった。エドミールはちらりと父親に目配せした。父親は目でうなずき返した。大丈夫、と。ここは金星神のエネルギーが集中して護ってくれている。

＊

祭壇の奥のスクリーンに、湖面を滑り、羽ばたく白鳥が映っている。マルガリータの故郷を訪れたエドミールが、朝もやに包まれた湖で自ら撮影してきた映像。映像に重なっているのはサン・サーンズの『白鳥』のピアノ演奏。バレエ『瀕死の白鳥』はマルガリータがもっとも好み、得意としていた演目で、スクリーンにマルガリータの姿はないが、映像も音楽も、彼女を彷彿とさせるものだった。生前の彼女を知る人々の記憶に静かに働きかけた。

アランデル大公は倅の才能の幅広さに改めて舌を巻く思いだ。祭壇のデザインから照明の演出、あらゆる部分にエドミールの手が入っている。アランデル自身、世に知られた画家であって、親の欲目を差し引いても、倅の才能の価値は誰よりもよくわかっていた。その倅が近年、手塩にかけたのがたった今音楽を提供しているピアノ奏者、桧山真である。もはや、この葬儀自体が倅の独断場と化していた。

"ポルタアウレア"とは、個人が自他を問わず己の才能を生きるユートピアへの門である。それはかつての黄金門、化学者の館、メッサナの合流地点だった。

特殊な国なのだ。地政学的にひじょうに難しい位置にありながら、古来より外部からの侵攻を受けていない。侵攻の意図は、そのエネルギーをそのまま持ち主に跳ね返す。侵攻者は跳ね返ってきた己のエネルギーをもろにかぶり、ありていにいって、ひどい目に遭うわけだ。"呪われた"と謂われる所以であるが、なんのことはない、己の発したものが己に帰ってくるだけのこと。

国家としてはそうなのだが、エドミールの場合はどうなのだろう。献花のために席をたつ人々にまぎれて、さりげなく会場から消えて行く倅を視界の隅で見送った。

侵攻は今、外からではなく、国土内で起こっている。

金星神よ、と彼は祈った。我らを守り給え。

351.

ボディーガードYを従えて宮殿の外へ走りながらエドミールは父アランデルと同じことを考えていた。

侵攻は今、外からではなく、国土内で起こっている。ポータルポルタアウレア国内移設は無謀だったということか。

（いや。それはない。ポータルが国外にあればポルタアウレアは無事かもしれない。だが他国は？ 無事では済まない、そう考えたからこそその決断だったのだ。決断そのものは間違っていないのだ。ならば、ポルタアウレア内でなんとかするしかない――）

はたとエドミールは立ち止まった。前方に人の姿、ヘルガ！？

ポルタアウレア滞在中のH&L医療チームは宮殿の警戒に当たっていたのだ。ヘルガは例の作業用ツナギに編み上げブーツ姿である。

彼女はエドミールを見てうなずいた。「移設現場でなにかありましたね、ここがいちばん、危険なのでは？」「そうなんだが……」

言いかけたエドミールをヘルガが手で止めた。彼女はエドミールの後方を見ていた。ボディーガードYもその時初めて気がついた。背後、数メートルのところに人がいるではないか。どこから湧いて出たのか！

プラチナブロンドを小さくまとめた美女の鋭い眼差しを受けて、その中年の男はいったん、立ち止まった。もうひとり若い男が……ポータブルカメラを手にして……植栽のかげから現れて、二

人でそろそろと近寄って来た。若干、びくびくし、様子を伺っているような上目づかいは二人とも一緒だ。

Yがマスターとヘルガの前に出て、誰何した。右手は懐、銃を取り出す姿勢で。「誰だ！！」

二人組はその外見からアジア系の人間だということはすぐに分かった。中年の男の方があまりうまくない英語で言った。「日本の、〇〇放送です」、と。
指先で胸にかかっている取材許可証を持ち上げてみせる。

メディアの人間だ！

「取材許可、取ってますよ」と開き直っている。

ボディーガードYは彼らの前に立ちはだかる。「宮殿は葬儀会場以外は立ち入り禁止だ。早々に退去されよ」

「あ？　ここ、立ち入り禁止？　いや、あんたたちの跡をついてきたらここへ出ちゃったんで。いやー、意外と警備が緩いんだあ」

相手のYの警戒を察知して、何かをつかんだと思ったものか、みるみる態度が大きくなった感じだ。中年男の頬にはうっすらと笑いが浮かんでいる。

「葬儀会場以外は立ち入り禁止だ。早々に退去されよ。三度目の警告はないものと心得るのだな」

Yは懐に入れていた手をわずかに引いて、握っているモノを垣間見せた。

ヘルガが小声で言い(行ってください、殿下。ここは彼に任せて)、
殿下はうなずいた。

「え、脅すんですか？　罪もない外国人のプレスを？」

「危険だから立ち去れと言っているのだ！　警告した以上、従わない者の面倒をみる筋合いは、当方にはない！」

「は？　何が危険なんすか、教えてくださいよ、我々は取材許可取ってるんですよ。そちらは皇太子殿下でしょ？」

「撮影は許さん！」

「取材許可には撮影許可も含まれてるんですがね、そんなことも知らないの？　ええ？　緩いうえに融通がきかないときてるよこのおじさん」語尾が笑っている。

『そんなことも知らないの?』以降は日本語だった。

こんなヨーロッパの片隅に日本語が聞き取れる者がいるとは思わなかったのだろう。が、あいにく、Yは先般の日本訪問の際、そこそこ日本語を勉強した経験がある。おかげで日本人プレスはかなり心証を損なった。

そのときだった、騒ぎが持ち上がったのは。

短い、女声の悲鳴。宮殿の奥、大公一家の居住スペースの方角だ。続いて、男声の悲鳴が迸った。

いっしゅん、Yは気を取られ、日本の〇〇放送二人組……丸川主任と平井カメラマン……はそのチャンスを見逃さなかった。だっと突進し、Yの傍らを駆け抜けてしまった。しかし、もう言うことを聞かない部外者に関わっているときではない。

宮殿の奥で何か起こっている！

ヘルガはエドミールの後を追って走った。宮殿の内外、四方八方から警備の者たちが居住スペースへ向かう。

彼らが儀礼用の制服ではなく武装しているのを見て、丸川主任の胸は激しく高鳴った。凄いぞ！

事件だ！！

ポルタウレアなんていう聞いたこともないヨーロッパの片田舎へ出張、それも葬式の取材だというのでクサクサしていたところだ。

走りながらヘルガは尋ねた。「エドミールさま！ どなたか居住区に！？」「——もしかしたら——」

葬儀会場以外の宮殿施設はいわばバックヤード、どこに誰がいるかまではさすがにエドミールも把握していない。しかし居住区に入れる者は限られている。

まさか、だった。居住区に入れる男性陣は自分も含めて出はらってる、あとは、ユミコとマミヤだけ——

ユミコは葬儀に参列していなかった。魂の母の葬儀ではあるが、別れの挨拶はもう済ませていたし、皇太子の婚約者としてのユミコの存在はまだ公表されていない。裏方に徹することにしたのだった。

ふと、誰かに呼ばれたような気がした。

(気のせい?)

だが、"気のせい"には従うことにしているユミコである。だいたい、そういう時は、なにかしら重要な情報が送られてくることが多いのだった。

ちょっと、忘れ物をとりに部屋へ戻りますから、と断って持ち場を離れた。廊下を歩いていると、なにかぴりぴりする感覚を覚えた。

(なにかしら.....)

わずかに眉をひそめて全身で周囲を探るが、周囲にはなにもない。

居住区とはいえ、あちらこちらに警備員が配置されていて、彼らは落ち着いている。守られているという安心感は十分にある。ゆっくりと階段をあがり、自室のドアを開ける。もちろん誰もいない。居住区は無人になるため、窓は閉められていて、外からの物音はひとつも入ってこないが、葬儀会場に設置されたマイクが会場の音を拾って宮殿内に流している。会場にいなくても儀式の進行状況がわかるのだった。

今はピアノ演奏が流れている。サン・サーンスの『白鳥』。とても——五歳児が弾いているとは思えない演奏。才能を見つけ出す嗅覚はH&Lのラウレンス氏に勝るとも劣らないとウワサされているエドミール・アウレアが一目で(一聴きというべきか)惚れこんだというが.....ユミコは人前では決して見せない、苦々しい笑みを浮かべる。

初めて真を見た時の、腰が抜けるかというショック。娘の奈々子の小さい頃にそっくりなのだ。母親の桧山夫人ひろは、どう思っているのだろうと時折、気になる。なにも思わないわけがない。自分が産んだ子が両親のどちらにも似ていない、どちらかの先祖の誰かに似ているということはまあある。だが、真の場合、夫の、いわゆる元カノにそっくり.....

奈々子が、というより、mitsuhaは、そこまで考えていたのだろうか。

彼女は人間ではないし、天使族でもない。人間の、生々しい感情生活までは考えていなかったかもしれない。ことに、男女の間、親子の間に起こるさまざまな行き違い、苦しみや痛み、懊悩について、考えていなかったかもしれないと、ユミコは思う。

いきなり、「ユミコさん！」と声をかけられて飛び上がるほど驚いた。
「お部屋へ戻られたと聞いたの、どこか、気分がすぐれないとかじゃないかしらって、心配になって——」
「ひろさん——」

振り向いたユミコの顔を見てひろは口をつぐんだ。ユミコの頬に流れる涙を見てしまった……

ユミコはあわててティッシュを探した。「あ……ちょっと、感傷的になってしまって……でも大丈夫よ。心配させてしまったのね、ごめんなさいね」
「いえ、あの、無理なさらないで」
「ええ大丈夫。このピアノ演奏を聴いていたら、胸が締め付けられて……つい……いろいろ考えてしまって」

ひろの足元にネコがうろうろしている。苦労して笑みを頬に押し上げていった。「お葬式、もうすぐ終わります。そろそろ行きましょう」
「そうね」

ユミコの部屋には大きな姿見がある。さまざまな場面で衣装合わせが必要になる、という侍女たちの進言で持ち込まれたものだ。ネコのバランケがその前に行き、落ち着かなげに行ったり来たりしている。

(——ん？)

ひろはふと違和感を覚えた。鏡のような、という比喻があるが、その姿見には室内にあるものとは違うものが映っていた。

＊

そのころボディーガードXは、再び警報を受け取っていた。
《鏡に注意しろ！ "やつ"は車のサイドミラーに逃げ込んだ！ どこかの鏡から物理空間に出る可能性が——！！》

同じ警報をレル・ヴァリスも受け取る。鏡と聞いてゾクゾクと鳥肌がたつ。そうだ、鏡が好きな奴がいたっけ！

そして彼らは女声の悲鳴を聞いたのだった。

353.

居住区の二階部分には各部屋に広いテラスが設置されていて、一部は外の……といっても、プライベートな……バラ園からも出入りできるという、開放的な造りになっていた。今はそのバラ園からの進入階段と、内部の階段に警備員たちが集中しようとしていた。

バラ園側からまっさきに進入したのは、桧山健だった。同じ敷地内にいたエドミールらが駆けつけるより早かった。ポータル設置現場からポルシェを飛ばして、それこそ飛んで帰ってきたのである。

そして、鉢合わせしたエドミールに向かって、「こんなところで何してる！！ 葬式に専念しろって言っただろ！！」と一喝したのだった。周りにいた者たちはみな驚いたのなんの。殿下に向かってこういう口がきけるとは、いったい何者だ！？

ユミコの部屋のテラスの窓が、外側に開いていた。そしてテラスでは妙な光景が繰り広げられている。

ネコが、全身の毛を逆立て虚空に向かって獐猛に歯を剥いたバランケが、なにかを威嚇していた。テラスには誰もいないのに。

ボディーガードXが庭園内でマスターと合流したと知って、Yはヘルガとともに建物内に入った。焦点はレディ・ユミコの部屋だと情報が来ている。足音を立てないように階段を駆け上がり、Yとヘルガはユミコの部屋へ、ほかの者らは両隣りの部屋へ向かう。どちらからもテラスへ出ることができるから。

ヘルガはまず、マミヤを発見した。頭を打ったのか、マミヤはふらついていた。ヘルガにすがりながらテラスへ出ようともがく。

そこで、バランケが猛り狂っている。

（そこに誰か、何かいるのか？ さっきの女の悲鳴は——！？）

Yは懷から銃を取り出した。姿勢を低くし、這うようにしてそろそろとバランケの近くへ、バランケが殺気を向けている方向へ銃を構える。見えないモノに銃を向けるなど、生まれて初めてだ。戦慄に首筋を冷や汗が伝う。

《撃つな！ 撃っちゃダメだ！！》

ふいにそんな考えがYの心中に湧いた。《今撃ったら、彼女に当たるぞ！！》

イヤホンからの通信とは明らかに違う。外からではなく、内側からきた感じだ。

（バランケ！？ おまえか！？ 彼女に当たるって、彼女とは——）

Yが一瞬、躊躇した時、バランケはついに見えない相手に躍りかかった。体当たりしたのだ。ネコの体は空中で確かに何かにぶつかり、跳ね返った。そして同時に空中から何かが湧いて出た。女——！ 今度こそYは叫んだ。「ユミコさん！！」

バランケは着地し、再び躍りかかった。噛みつき、前足で引っ掻き、後ろ足で蹴りまくる。ネコが一人で……一匹で……空中で暴れているようにも見えるが、確かに相手がいる。どんなネコ好きであっても今後、見る目が変わろうという、凄まじい剣幕。ネコの一面が獐猛な肉食動物だということがまざまざとわかる一場面だ。

Yもまた、ふだんゴロゴロ寝ころび、にやんにやんとまとわりついてくるバランケしか知らなかった。

バランケはさんざん相手をやっつけ、がっつと噛みついておいて、その勢いで引きずり倒した。なににもなかったところに、影のようなモノが現れた。見守っていた者たちから驚きの声があがる。

「バランケ、そのくらいでいい。オレの分もとっておけ」

あとがき

サブタイトルは『大公妃去る』

大公の妻が亡くなった時、『崩御』を使っていいのか？ 大公自身ならば構わないでしょうが、ポルタアウレアの人々はこういうことにあまり拘らないらしいので、マルガリータ妃は『逝去』としました。

大公妃の葬儀で真がピアノを弾く、曲はサン・サーンスの『白鳥』、という案はずっとあって、さて、どこで入れようか。ちょっと強引かも知れど、イリチャが冥界へ行ってる間に入れてしまおう。でもこの場面が出てくるということは——そう遠くないかもしれません。

レダと白鳥…ギリシア神話では白鳥に変身したゼウスがレダを誘惑したとありますが…若き日のアランデルさまがマルガリータさん（レダ）を誘惑したとか、そんなことはまったくありません！ 少なくとも筆者はなんにも考えてませんでした！ が、ひょっとしたらあり得るかも……

2025年12月7日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十七章 Grand duchess leaves

2025年12月10日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社